

宋版一切経東禅寺版に五面の一紙が挿入された理由

佐々木 勇

(受理日二〇一四年十月二日)

〇、本稿の目的

宋版一切経研究は、近年、急速に進んでいる。その書誌的問題の一つとして、東禅寺版および開元寺版（いわゆる福州版）における、一紙三十行五面の一紙がある。

宋版一切経東禅寺版および開元寺版は、一紙三十六行六面を基本とする。その三十六行六面の紙を継いで仕立てられた一帖中に、三十行五面の一紙が混じている場合がある。

本稿は、宋版一切経福州版に、三十行五面の一紙が挿入された理由を説明することを目的とする。

一、本稿の対象資料

本稿の目的から、宋版一切経東禅寺版の、早期刊本全体の調査を成すことが求められる。

現存東禅寺版の中、比較的早期の印本として、高野山金剛峯寺蔵本が知られている。しかし、金剛峯寺蔵本は、「勸学院蔵宋版一切経目録」(水原堯栄『高野山見存蔵経目録』一九三一年、森江書店)に依れば、補本を含め三七四四帖の現存数であり、全体の四割程度を欠く。

これに次ぐものとして、ほぼ全蔵を伝える醍醐寺蔵本が有る。金剛峯寺蔵本の十年後の印造である。

醍醐寺蔵本に続く本源寺本・東寺蔵本・書陵部蔵本・金澤文庫蔵本は、

四十年〜七十年遅れる印造であり、東禅寺版の欠函・欠帖も比較的多い。また、知恩院蔵本は、開元寺版が中心である。

したがって、本稿の対象資料として最良の宋版一切経は、醍醐寺現蔵本である。よって、本稿は、醍醐寺蔵東禅寺版を対象資料とする。本稿の筆者は、幸いにして、重要文化財醍醐寺蔵宋版一切経全巻の悉皆調査に加わり、東禅寺版全体に親しく接する幸運に恵まれている。醍醐寺蔵東禅寺版に関する本稿の記述は、すべて原本調査に基づく。調査に全面的な御援助を頂いた醍醐寺御当局ならびに小林芳規広島大学名誉教授を代表とする調査団全員に、深甚の謝意を表す。

二、醍醐寺蔵東禅寺版における五面一紙挿入帖

醍醐寺蔵東禅寺版において、五面の一紙を挿入した帖の初出例は、第237寸函「中論」巻第二〜巻第四の三帖である。その中で、題記の年月が最も早いのは、巻第四の「元祐九年（一〇九四）正月 日」である。（巻第二・第三は、翌月「元祐九年二月 日」題記である。）

その「中論」巻第四は、第十三板を五面とし、第十四紙以下を継いでいる。全二十三板で、第十八板第四面から、紙背に印刷されている。巻第二・第三も、これに近い（次項参照）。

以下、五面の一紙が挿入される帖は、左の如くに続く。

第239是函²⁴³「般若燈論」巻第十五

「元祐九年四月 日」題記。全二十板。

- 同右 2464 『十二門論序』〔元祐九年四月 日〕題記。全二十板。
 同右 2465 『百論序』〔元祐九年四月 日〕題記。全十九板。
 第240 競園2475 『廣百論釋論』卷第七
 同右 紹聖元年 月 日〕題記。全十九板。
 同右 2478 『廣百論釋論』卷第十
 同右 紹聖元年六月 日〕題記。全十九板。
 第242 父函2493 『十住毘婆沙論』卷第十三
 同右 紹聖元年五月 日〕題記。全十八板。
 第246 嚴函2531 『攝大乘論』卷上
 同右 2535 『攝大乘論』卷下
 同右 紹聖元年六月 日〕題記。全十八板。
 同右 2537 『攝大乘論本』卷中
 同右 紹聖二年三月 日〕題記。全十九板。
 同右 2539 『攝大乘論釋』卷第一
 同右 紹聖三年正月 日〕題記。全十九板。
 同右 2540 『攝大乘論釋』卷第一
 同右 紹聖四年正月 日〕題記。全十九板。
 同右 2541 『攝大乘論釋』卷第二
 同右 紹聖四年六月 日〕題記。全十九板。
 同右 2543 『攝大乘論釋』卷第五
 同右 紹聖四年十月 日〕題記。全二十五板。
 第250 當函2580 玄奘訳 『攝大乘論釋』卷第四
 同右 紹聖元年 月 日〕題記。全十八板。
 同右 2581 玄奘訳 『攝大乘論釋』卷第五
 同右 紹聖元年十月 日〕題記。全十九板。
 同右 2583 玄奘訳 『攝大乘論釋』卷第七
 同右 紹聖二年二月 日〕題記。全二十板。
 同右 2584 玄奘訳 『攝大乘論釋』卷第八
 同右 紹聖元年十月 日〕題記。全十九板。
 同右 2585 玄奘訳 『攝大乘論釋』卷第九
 同右 紹聖元年九月 日〕題記。全二十一板。

右のとおりであり、元祐九年（一〇九四）・紹聖元年（同上）以降刊刻の十八板を超える帖では、五面の一紙を挿入することが原則となる。⁵⁾しかし、元祐九年正月より前の刊刻帖では、十八板以上であっても、五面の一紙は挿入されない。

また、すでに指摘されているとおり、五面の一紙は、一帖のほぼ中間に挟まれる。たとえば、右に挙げた諸巻のうち、全十八板の帖では第九板または第十板、全十九板の帖では第十板、全二十板の帖では第十板または第十一板を五面とする。

三、東禪寺版の五面一紙に見られる「除六行…兩邊無厚薄」類注記

1. 醍醐寺藏東禪寺版の五面一紙に見られる注記
 醍醐寺藏東禪寺版では、一紙三十行五面の柱刻に、次のような文章が刻されている。一切経における出現順に抜き出す。

第237寸函
 2444 『中論』卷第二（元祐九年（一〇九四）二月 日〕題記）

①此昏除六行媿得粘縫兩邊無厚薄《第十二板第五面一行目下》
 この『中論』卷第二の第十二板は、第五面一行目下空白に上の一行を刻して、第六面を空白としている。したがって、第十二板は、経本文は五面ながら一紙六面である。この第十二板に続けて裏表紙を貼り、続く第十三板から裏面に印刷している。全二十三板である。

2445 『中論』卷第三（元祐九年（一〇九四）二月 日〕題記）
 ②此昏除六行媿得粘縫兩邊無厚薄《第十三板第六面右端》
 第十三板の第六面右端に右の一行を刻し、第六面を空白とする。その第十三板に裏表紙を続け、第十四板から裏面に印刷する。全二十四板。

第239是函

2463 『般若燈論釋』卷第十五（元祐九年（一〇九四）四月 日〕題記）

③除六行要粘策二邊不厚薄《第十一板第四面と第五面との間の柱刻》
 この帖は、片面印刷の全二十板である。

2464 『十二門論』（元祐九年（一〇九四）四月 日〕題記）

④除六行要粘〔策〕二邊不厚薄《第十一板第四面と第五面との間の柱刻》

第十一板第六面を空白とし、第十二板から裏面に印刷する。全二十板。

2462 『百論』卷上（元祐九年（一〇九四）四月 日）題記）

⑤ 此昏除六行要粘策二邊不厚薄《第十板第四面と第五面との間の柱刻》この帖は、片面印刷の全十九板である。

第240競函

2475 『廣百論釋論』卷第七（紹聖元年（一〇九四）月 日）題記）

⑥ 除六行要粘策二邊不厚薄《第十板第四面と第五面との間の柱刻》第十五板第四面から裏面に印刷する。全十九板。

2478 『廣百論釋論』卷第十（紹聖元年（一〇九四）六月 日）題記）

⑦ 除六行要粘策二邊不厚薄《第十板第四面と第五面との間の柱刻》第十板第四面から裏面に印刷する。第十板が一紙五面であるため、紙背第一面を空白とし、表面と印面を合わせている。全十九板。

第246巖函

2535 『攝大乘論』卷下（紹聖元年（一〇九四）六月 日）題記）

⑧ 除六行要粘策二邊無厚薄《第十板第四面と第五面との間の柱刻》第十板第四面から裏面に印刷する。やはり、紙背第一面を空白とし、表面

と印面を合わせる。全十八板。

2537 『攝大乘論本』卷中（紹聖二年（一〇九五）三月 日）題記）

⑨ 除六行要粘策二邊不厚薄《第十板第四面と第五面との間の柱刻》第十六板第四面から裏面に印刷している。全十九板。

第250當函

2539 『攝大乘論釋』卷第四（紹聖元年（一〇九四）月 日）題記）

⑩ 除六行要粘策二邊不厚薄《第九板第四面と第五面との間の柱刻》第十四板から裏面に印刷する。全十八板。

2539 『攝大乘論釋』卷第五（紹聖元年（一〇九四）十月 日）題記）

⑪ 除六行要粘策二邊不厚薄《第十板第四面と第五面との間の柱刻》第十五板から裏面に印刷する。全十九板。

2539 『攝大乘論釋』卷第七（紹聖二年（一〇九五）二月 日）題記）

⑫ 除六行要粘策二邊不厚薄《第十板第四面と第五面との間の柱刻》第十五板第四面から裏面に印刷する。全二十板。

2534 『攝大乘論釋』卷第八（紹聖元年（一〇九四）十月 日）題記）

⑬ 除六行要粘策二邊不厚薄《第十板第四面と第五面との間の柱刻》第十五板第四面から裏面に印刷する。全十九板。

第十五板第四面から裏面に印刷する。全十九板。

2539 『攝大乘論釋』卷第九（紹聖元年（一〇九四）九月 日）題記）

⑭ 此昏除六行要粘策二邊不厚薄《第十一板第四面と第五面との間の柱刻》第十七板から裏面に印刷する。全二十一板。

第252力函

2603 『究竟一乘寶性論』卷第一（紹聖二年（一〇九五）正月 日）題記）

⑮ 除六行要粘策二邊不厚薄《第九板第四面と第五面との間の柱刻》第十四板から裏面に印刷する。全十八板。

第255盡函

2637 『大乘廣五蘊論』卷第五（紹聖二年（一〇九五）五月 日）題記）

⑯ 除六行要粘策二邊不厚薄《第九板第四面と第五面との間の柱刻》全十九板を片面印刷とする。

2638 『寶行王正論』卷第一（紹聖二年（一〇九五）四月 日）題記）

⑰ 除六行要粘策二邊不厚薄《第十板第四面と第五面との間の柱刻》第十五板第四面から裏面に印刷する。全二十板。

第256命函

2647 『如實論』卷第一（紹聖二年（一〇九五）正月 日）題記）

⑱ 除六行要粘策二邊不厚薄《第十板第四面と第五面との間の柱刻》全十八板を片面印刷とする。

第257臨函

2651 『廻諍論』卷第一（紹聖二年（一〇九五）二月 日）題記）

⑲ 此昏除六行要粘策二邊不厚薄《第十二板第四面と第五面との間の柱刻》全二十三板を片面印刷とする。

第258深函

2660 『長阿含經』卷第一（紹聖二年（一〇九五）四月 日）題記）

⑳ 此昏除六行要粘策二邊不厚薄《第十板第四面と第五面との間の柱刻》第十六板第四面から裏面に印刷する。全二十一板。

第261夙函

2700 『中阿含經』卷第十六（紹聖二年（一〇九五）四月 日）題記）

㉑ 除六行要粘策二邊不厚薄《第十板第四面と第五面との間の柱刻》第十四板第四面から裏面に印刷する。全十八板。

2702 『中阿含經』卷第十八（紹聖二年（一〇九五）四月 日）題記）

②除六行要粘策二邊不厚薄〔第九板第四面と第五面との間の柱刻〕第十四板第四面から裏面に印刷する。全十八板。

2703「中阿含經」卷第十九（紹聖元年（一〇九四）三月 日）題記

③除六行要粘策二邊〔第九板第四面と第五面との間の柱刻〕第十四板第四面から裏面に印刷する。全十八板。

右に記した二十三例が、醍醐寺藏東禪寺版全体中に見出せた「除六行」刻記の全例である。

2. 醍醐寺藏本以外の福州版五面一紙に見られる注記

金剛峯寺藏本東禪寺版にこの「除六行要粘策二邊不厚薄」等の刻記が存するものか否か、現在公刊されている目録では不明である。⁸⁾しかし、本源寺藏本・東寺藏本・書陵部藏本・金澤文庫藏本に、以下の刻記を見出せる。

A. 本源寺藏東禪寺版の五面一紙に見られる注記

「共同研究——本源寺藏宋版一切経調査報告——」（同朋学園佛教文化研究所紀要）創刊号、一九七九年三月）に、「一紙が四折五面分のみものがあり、この場合、通例版心が一折目の折目谷部にあるものが、一紙五面分の次紙より折目山部になるが、紙五面分の四折目に「除六行要粘策二邊不厚薄」等と記すものもある」との指摘が存する。巻頭に掲載された写真で、「大乘廣五蘊論・大乘五蘊論」の「除六行要粘策二邊不厚薄」を確認することも可能である。

また、小島恵昭編「本源寺藏宋版一切経（三聖寺旧藏）目録」（同右）「備考」には、「除六行要粘策二邊不厚薄」に類する以下の注記が存する。

第255盡函「大乘廣五蘊論・大乘五蘊論」（紹聖二年（一〇九五）題記。以下同じ。）「第九紙は五面分のみで、四折目に「除六行要粘策二邊不厚薄」と有」。同「寶行王正論」第十紙は五面分のみで、四折目に「除六行要粘策二邊不厚薄」と有。第256命函「如實論」第十紙は五面分のみで、四折目に「除六行」□□と有。第257臨函「迴諍論」第十二紙は五面分のみで、四折目に「除六行要粘冊二邊不厚薄」と有。第258深函「長阿含經」卷第一「第十紙は五面分のみで、四折目に「此昏除六行要粘策□□□□」。

右は、醍醐寺藏本に見出せた注記にすべて一致し、それに含まれる。⁹⁾

B. 東寺藏東禪寺版の五面一紙に見られる注記

東寺御当局の御厚意により、第237寸・第238陰函の宋版一切経東禪寺版を閲覧することができた。

東寺藏本の寸函「中論」卷第二（元祐九年（一〇九四）二月題記）にも、第十二板第五面一行目下空白の醍醐寺藏本と同じ位置に、醍醐寺藏本当該帖と本文の「此昏除六行媿得粘縫兩邊無厚薄」の注記が存した。東寺藏東禪寺版「中論」卷第二は、補刻葉を交えるものの、醍醐寺藏本と同板を用いた印本である。

しかし、東寺藏宋版一切経東禪寺版「中論」卷第三には、醍醐寺藏本に存した第十三板第六面右端「此昏除六行媿得粘縫兩邊無厚薄」の注記が見られない。それは、東寺藏本が「中論」卷第三第十三紙第六面を切り取り、第十四紙以降を繋いでいるためである。おそらく、東寺藏本の版木にも、第十三板第六面右端に醍醐寺藏本と本文の記文が存したものであろう。「此昏除六行」の注どおりに、六行一面を裁断すれば、第六面の右端に記された一文は見えなくなる。ただし、注視すると、第六面右端に存した文字の端が点として残っており、醍醐寺藏本と同一板であったことが知られる。柱刻や刻工名も同一である。

なお、東寺藏東禪寺版は、「中論」卷第二・卷第三とも、本文五面一紙の空白第六面を残さず、第五面までで紙を裁断して、次紙以降を貼り継いでいる。両面印刷にもしない。東寺藏本「中論」卷第二・卷第三の印造者は「楊備」、醍醐寺藏本の印造者は「福州東禪經生王賜」である。印造者が異なり、装丁が異なった例である。

C. 書陵部藏福州版の五面一紙に見られる注記

書陵部藏福州版一切経では、醍醐寺藏本に「此紙除六行要粘策二邊不厚薄」等の注記が存した第237寸函・第239是函当該帖は、補写本であり、同じく第240鏡函・第261夙函の当該帖は、開元寺版である。¹⁰⁾

しかし、その開元寺版第255盡函「寶行王正論」の第十板第四面と第五面との間に、醍醐寺藏東禪寺版で⑩とした「除六行要粘策二邊不厚薄」の柱刻が存する。この第十板柱刻は「八 卷 十 吉」であり、醍醐寺藏東禪寺

版の「盡 糊卷 拾 葉叢」とは異なる。開元寺版と見られるこの板に、東禪寺版と同位置に同文の注記が彫られている。刻工が異なるため、この注記の文字にも小異が有る。

書陵部蔵宋版一切経福州版における「此紙除六行：」注記は、右が唯一例である。¹¹⁾

D. 金澤文庫蔵東禪寺版の五面一紙に見られる注記

『神奈川県立金沢文庫保管 宋版一切経目録』(一九九八年三月、神奈川県立金沢文庫)の「刻施」「備考」項目には、次の刻記が有る。本目録の⑩は第十紙を、⑨は第九紙を示している。

- 534 中阿含経 卷第十六 夙(261) 東禪寺版(紹聖二年)
- ⑩ 除六行要粘策二邊不厚薄
- 536 中阿含経 卷第十八 夙(261) 東禪寺版(紹聖二年)
- ⑨ 除六行要粘策二邊不厚薄
- 537 中阿含経 卷第十九 夙(261) 東禪寺版(紹聖二年)
- ⑨ 除六行要粘策二邊

これらも、醍醐寺蔵本の刻記と一致し、醍醐寺蔵本のそれに含まれる。

以上、これまでの調査で見出すことができた「此紙除六行：」の記文は、醍醐寺蔵東禪寺版の第237寸函(261夙函)に見られた注記に総て含まれる。同一経巻の注記は、位置・字形まで等しい。

よって、これらの注記は、各本の印刷時に追刻されたものではなく、刊刻当初にすでに彫られていたものである。

醍醐寺蔵東禪寺版にもごく一部の欠函・欠帖が存するため、今後の他蔵東禪寺版調査で記文例が追加される可能性は残る。しかし、「此紙除六行：」記文の大部分は、右で覆えているものと思われる¹²⁾。その中で、題記の年月が最も早いものは第237寸函の「中論卷第二」の「元祐九年(一〇九四)二月日」であり、遅いものは第255寸函¹³⁾『大乘廣五蘊論・大乘五蘊論』の「紹聖二年(一〇九五)五月日」である。記文が見られない五面一紙挿入帖の初出は、元祐九年(一〇九四)正月であった。

五面の一紙を挿入する工夫は、元豊三年(一〇八〇)の東禪寺版刊刻開始から十四年後に、考案されたものと考えられる。

3. 「除六行：」類注記の意味

先に出現順に掲げた醍醐寺蔵東禪寺版における「此紙除六行要粘策二邊不厚薄」等の記文を、同文をまとめて再掲すれば、左のa～gとなる。

- a 此紙除六行媿得粘縫兩邊無厚薄(①②)
- b 除六行要粘策二邊不厚薄(③④⑥⑦⑨⑩⑪⑮⑯⑰⑳㉑㉒)
- c 此紙除六行要粘策二邊不厚薄(⑤⑭⑳)
- d 除六行要粘策二邊不厚薄(⑫⑬⑱)
- e 此紙除六行要粘冊二邊不厚薄(⑰)
- f 除六行要粘策二邊無厚薄(⑧)
- g 除六行要粘策二邊(⑳)

右「此紙除六行：」の注記は、一紙五面の紙にのみ存した。したがって、「此紙除六行」「除六行」「除六行」は、一紙(板)三十六行(每半折六行で六面)とする東禪寺版の六行を除し、二紙三十行とすることである。すなわち、これらは、記文を刻した一紙の六行一面を取り去り、五面とすることの断わり書きである。

これ以外の記文異同は、a「媿」|b～g(ナシ)、a「得」|b～g「要」、a「粘縫」|b～g「粘」、a「兩邊」|b～g「二邊」、a f「無」|b～c de「不」|g「厚薄」共ナシ)であって、全文同主旨と考えられる。

ただし、出現順第一第二のa(①②)は、b以下(③～)とやや異なる。まず、最多のb「除六行要粘策二邊不厚薄」を解釈する。aの「得」に対応する「要」は、補助動詞であろう。「粘」は、aの「粘縫」に相当する。紙を貼り継ぐことであろう。「策」はe「冊」と同意で、帖装(経摺装)の一冊のことと解釈される。そうであれば、「二邊」は、帖の長辺左右の二邊であろう。「不厚薄」は、「厚薄」を作らない意であろう。

したがって、b「除六行要粘策二邊不厚薄」は、「六行を除く。策を二邊に粘(つ)けて厚薄せざるを要む。」と訓読され、多くの紙を貼り合わせたこの一冊に紙継ぎによる左右二邊の厚みの差が生じないように、この紙の六行一面を除く、と解釈できる。

全紙を三十六行六面とし、それを貼り合わせて折り、帖装にすれば、紙継ぎ位置は必ず右邊となる。そのため、紙数の多い帖では、右邊が左邊より厚くなる。これを避けるため、帖の中間に三十行五面の一紙を挿入し、以降の紙継ぎを左邊に移動させた。一面六行を誤脱したのではない、とこの注記

は語っている。

c 以下も、同内容である。

a 「此昏除六行媿得粘縫兩邊無厚薄」(此の紙六行を除く。媿、両辺を粘縫して厚薄無きを得んとす)の「媿」は、この工夫を考案した人名ではなからうか。

「媿」が人名であれば、醍醐寺藏東禪寺版の刻工「媿潘」(第258深函2670『深字音』第四紙・第287安函2972『安字音』第四紙)、あるいは、「媿字」(第270松函296『増壹阿含經』卷第四十六第十四紙)が、その該当者なのかもしれない。

別の訓読も考えられよう。しかし、記文は、右のような意味に解釈される。これが、本稿で明らかにすることを目的とした、宋版一切経東禪寺版に三十行五面の一紙が挿入された理由である。その理由は、外ならぬ東禪寺版中に彫り込まれていた。

四、醍醐寺藏東禪寺版における五面一板と印造との関係

宋版一切経東禪寺版における「此昏除六行」等の注記は、「紹聖二年(二〇九五)五月」の第255畫函『大乘起信論 序』を最後に見られなくなった。既掲二十三例の刻文以外に、第六面に存した注記が裁断されたものもある。しかし、約一年間に二十三例存した注記がその後全く見られなくなったのは、大冊に五面の一紙を挟むことが徹底され、説明不要と判断されたためであろう。

五面の一板を帖の半ばに入れる目的は、帖左右の厚さを等しくするために紙継ぎ邊を変更することであった。したがって、五面の一紙に以降の紙を継ぎ、最後まで片面印刷することが想定されている。

ところが、醍醐寺藏本は、五面の一板が挿入された帖の約四割を、両面刷りとしている。帖の途中で背面に印刷したのは、五面の一板が活かされな

い。「刊」と「印」との時が隔たり、刊刻者の工夫を解せなくなったための印造であろうか。あるいは、最初の刊刻から百年以上が経ち、使用するうちに帖が膨らむのを見て、全体の厚さを抑えようとしたためでもあろうか。

五、結び — 関連する問題 —

宋版一切経東禪寺版に五面の一紙が挿入されたのは、紙数の多い帖において、両辺の厚さを揃えるためであった。

これに関連する問題として、次の諸点がある。

1. 五面の一紙が挿入された次の紙から、柱刻が第二面と第三面との間に移動することが多い。これは、なぜか。
 2. 五面の一紙は、東禪寺版に続く開元寺版においても見られる。開元寺版における実態は、いかなるものか。
 3. 開元寺版の次の思溪版では、一紙五面が基本となる。そして、思溪版の柱刻は、紙端に刻される。それは、なぜか。
- いずれも、各宋版一切経全体の調査の上に論ずべき問題である。調査を進め、別稿としたい。

【注】

- (1) 『日本古典籍書誌学辞典』(一九九九年、岩波書店)「東禪寺版藏經」の項目(尾崎正治執筆)にも指摘がある。また、牧野和夫「關於宋版大藏經中一版五半葉三十行」版片的考察」(『藏外佛敎文獻』第十四輯、二〇一〇年八月)、同「福州宋版大藏經の研究」宋版一切経の「一板五面三十行」に關する一考察」(『實踐女子大學文學部紀要』第五十三集、二〇一一年二月)、同「高野山金剛峯寺藏『四分律藏』(宋版大藏經ノ内)について」(かがみ)第四十二号、二〇一二年三月)では、「五面一板」(三十行)の葉を持つ福州版多数が、具体的に示され、試案として、「五面一板」は、「想定された両面刷の折り返しの目安であった」と推測された。

しかし、牧野論文中でも記されるとおり、現存本における両面刷の開始位置は、「五面一板」の挿入位置よりも、何紙か後になることが少なくない。また、五面の一紙が挟まれない帖でも両面刷され、逆に、五面一紙が有っても両面刷りされない帖が多数存在する。

- (2) 野沢佳美「金澤文庫藏宋(福州)版一切経について」(『神奈川県立金澤文庫保管 宋版一切経目録』(一九九八年、金澤文庫)所収)に依ると、次の通りである。

- 金剛峯寺蔵本 一一七九年(補刻記) 〓一一八九年の間に印造。
 醍醐寺蔵本 一一八九年(補刻記) 〓一一九五の間に印造。
 本源寺本 一二二六年以降印造。
 東寺蔵本 一二三九年(補刻記) 〓一二四二年の間に印造。
 書陵部蔵本 一二五一年(補刻記) 以降に印造。
 (3) 金澤文庫蔵本 宝祐年間(一二五三〜一二五八)に印造。
 山本信吉『古典籍が語る―書物の文化史―』(二〇〇四年、八木書店) 245頁。
 (4) 2063は、明年出版予定の目録における通帖番号である。以下、同じ。
 (5) 注1)牧野論文、参照。元祐九年から間もない刊刻帖、あるいは、崇寧二年(一一〇三)以降の追離板に、十八板以上であつても五面の一紙を挟まないものが若干存する。しかし、それを含めても、例外は一割に満たない。なお、『注大乘入楞伽經』等の東禪寺版追離版では、全十六板や十七板でも、五面の板を挟む例が有る。
 (6) たとえば、『元豐八年(一一〇八五)乙丑歲五月日』の題記を有する『法苑珠林』には、十八板以上の巻にも五面の一紙が挿入されていない。したがつて、題記が無くとも、五面の一紙が挿入された東禪寺版であれば、元祐九年(一一〇九四)以後の刊刻である、と知られることとなる。
 (7) 『宋史』では、紹聖元年是、夏四月壬丑改元とあり、『東方年表』(一九九六年、平楽寺書店)も元祐九年が四月に紹聖元年となつたことが記されている。しかし、東禪寺版の題記は、『紹聖元年三月 日』とされる。
 (8) 醍醐寺蔵本にこの注記が存した帖のうち、金剛峯寺に東禪寺版が現存するとされるのは、第237寸函『中論』卷第三・第240競函『廣百論釋論』卷第七・第246巖函『攝大乘論』卷下の三帖のみである。帖中の捨錢刊記等をもまま記す「刊記與書目録」からは、この三帖に「除六行要粘策」二邊不厚薄」等の注記が存することは知られない。原本閲覧の機会を得たい。
 (9) 他に醍醐寺蔵本に注記が見られた帖は、『廣百論釋論』卷第七を除き、本源寺蔵宋版一切経では欠本か大破の帖である。『廣百論釋論』卷第七は完存するらしい。しかし、「除六行……」の注記が存する記述は目録に無い。
 (10) 『圖書寮漢籍善本書目附録大藏經細目』(一九三一年、文求堂書店・松雲堂書店)および書陵部蔵の写真で確認した。題記が存しない場合も、紙背

- に「開元經局染黃紙」の長方印が押されており、開元寺版のようである。
 (11) 現在のところ、開元寺版における「此紙除六行……」注記の他例は、管見に入らない。
 (12) 目録では、「刻施」と「備考」との記事が一致しないものが有るため、醍醐寺蔵本と一致する方を掲げた。
 (13) 醍醐寺蔵宋版一切経の『大般若波羅蜜多經』六百卷は、開元寺版である。そのため、本稿の対象とはしていない。この東禪寺版『大般若波羅蜜多經』における実態を知るべく、書陵部蔵東禪寺版を調査した。しかし、「崇寧二年(一一〇三)十一月二十二日」の題記を有する『大般若波羅蜜多經』六百卷に十八板を超える巻は無く、五面一紙を挟む帖は皆無であつた。「此紙除六行……」の記文例も、見出せなかつた。
 (14) 太田辰夫『中国語歴史文法』(朋友書店、二〇一三年新装再版) 197頁。同『中国語史通考』(一九九九年、白帝社) 42頁は、「得」を「義務・当然」の意の補助動詞とする。『中国語史通考』42頁の「捺女祇域因縁經」(『大正新修大藏經』No. 0533)の用例参照。これらの記文の訓読について、広島大学教育学研究科佐藤大志氏にお教えいただいた。記して、御礼申しあげる。
 (15) 刻工「媿」は、時代が降る嘉定六年(一二二二)版『張丘建算經』にも、「媿茂」(卷下十二)・「媿中」(同十六)・「媿元」(同三十六)の名を見出せる(一九八〇年、文物出版社影印に依る)。
 (16) 五面の板に続く板から背面に印刷するか、五面の板の第四面から紙背に印刷する場合が少なくない。
 (17) 醍醐寺蔵東禪寺版には、『淳熙己亥(六年、一一七九)……捨錢彫此板』や、『安撫使賈侍郎捨』(紹熙二年(一一九一)刊および丙辰(慶元二年、一一九六)刊)の捨錢刊記が見られる。
 (18) 醍醐寺蔵東禪寺版は、字音帖を除く全帖の、二割強を両面刷りとしていいる。五面の一紙が無く両面刷りされた帖は、五面一紙が挟まれて両面刷りされた帖の二倍以上存する。
 (19) 開元寺版で一紙五面の次の板から柱刻位置が一面分ずれ、第二面と第三面との間になる事実は、「共同研究―本源寺蔵宋版一切経調査報告―」(『同朋学園佛教文化研究所紀要』創刊号、一九七九年三月)、牧野和夫「日本現存資料から見た宋版大藏經の〈修〉について―「入(埋)木」の世界―」

〔実践国文学〕84号、二〇一三年十月）においても指摘されている。しかし、その理由は、述べられていない。また、右牧野論文にも指摘される通り、開元寺版では、最終紙直前の紙が五面となることもある。この点も含め、さらに考えたい。

(20) 現時点では、以下の見通しを持っている。

1. 五面一紙の次の柱刻を、それ以前同様に第一面と第二面との間に刻したのでは、柱刻が折目の山となる。山に位置する柱刻文字は経年によって摩滅し、紙継ぎの糊が剥がれた場合、その紙をどこに入れるべきか不明となる。それを避けるためであろう。

2. 開元寺版では、東禪寺版より総紙数が少ない場合でも五面の一紙を挿入している（注①）牧野論文、参照。また、東禪寺版の補刻板においても、かつて六面であった板を五面とした例がある。以後、一面ずつ経本文がずれる。たとえば、第151五函『大雲請雨經』は、醍醐寺藏東禪寺版ではすべて一板六面である。しかし、書陵部藏東禪寺版では全十七板の第九板を五面としたため、最終紙本文末は醍醐寺藏本の一面後となっている。書陵部藏東禪寺版第166効函『如意輪陀羅尼經』も同様に、全十九板の第九板を五面とし、最終紙本文末は醍醐寺藏本の一面後である。類例は、比較的多い。このように、東禪寺版の後版あるいは開元寺版は、東禪寺版に比して、五面一紙の挿入が全体に亘り、かつ徹底している。

3. 思溪版で三十行五面一紙が中心となるのも、東禪寺版に五面の一紙を挿入したのと同じ理由であると考えられる。すなわち、帖の全体を一紙五面にすれば、一紙ごとに紙継ぎ位置は左右に分かれ、均等の厚みとなる。思溪版は、一紙五面とするために、紙幅を12cm程度短くしている（奈良県大般若経調査報告書一資料篇1）（一九九二年、奈良県教育委員会）。

なお、思溪版でも、初期の刻板では、一紙六面のものが存する。たとえば、西大寺藏思溪版初印本『大般若経』では、卷二二〇までは、それ以降と版式が異なり、開元寺版の形式を継承することが指摘されている。『奈良県大般若経調査報告書一本文篇』（一九九二年、奈良県教育委員会）12頁、牧野和夫「思溪版大般若波羅蜜多經と開元寺版大藏經——その版式上の接点について（一）——」（『水門』24、二〇一二年九月）、参照。岩屋寺藏思溪版について、この点を実見することができた。佐々木勇「一紙六面から一紙五面へ——宋版一切経思溪版版式の転換点——」（『いとくら』第十号、

二〇一五年二月刊行予定）を御覧いただきたい。

そして、一紙六面の思溪版に一紙五面の板を入れた場合、その次の柱刻位置は、右端糊代部分に移動する場合があることが、注⑨牧野論文で紹介されている。全紙を五面とした場合、柱刻を谷位置とするためには、柱刻の位置を一紙ごとに変更し続ける必要がある。この操作を避けるため、思溪版では柱刻を紙端にし、柱刻文字を保護するため、柱刻の有る紙を下に継いだものであろう。

しかし、柱刻が見えないことは不便であった。思溪版に続く、磧砂版・普寧寺版では、全紙を五面とする思溪版方式を採用しつつ、柱刻を紙端にしなかった。その結果、磧砂版・普寧寺版の柱刻は、一紙ごとに、第一面・第二面間と第二面・第三面間とを交互に移動することとなった。

【付記】

貴重な原本を閲覧させてくださった醍醐寺・東寺・岩屋寺、写真閲覧を御許可下さった宮内庁書陵部・増上寺の関係各位に、心中より御礼申しあげます。

Why Did 東禪寺版 (the South Song Dynasty Edition of the Buddhist Canon) Have a Paper
Which There Are Five Pages?

Isamu Sasaki

Abstract: As for 東禪寺版 (the South Song Dynasty Edition of the Buddhist Canon), there are 36 lines of letters on one piece of paper. Each paper is divided into six. In 東禪寺版, there are books which have a five pages paper. A purpose of this article is to clarify reason for being of the five pages paper. The document for this article is the 東禪寺版 in Daigo-ji Temple (醍醐寺). It is the most suitable document for achievement of purpose of this report. As a result of having investigated the whole, the following things became clear. 1. There is the five pages paper in the middle of the books. 2. There is a note such as "此帋除六行媿得粘縫兩邊無厚薄" in the five pages paper. 3. The five pages paper was put to make a book flat. 4. The papers came to be put in books after 1094.

Key words: the South Song Dynasty Edition of the Buddhist Canon, the papers which there are six pages, a paper which there are five pages, flat books

キーワード：宋版一切経東禪寺版，六面の一紙，五面の一紙，無厚薄